

カフェ・コン・レツチェ ペルー・サッカーのいま

網野徹哉

首都リマを漂う春の霧には、その日の朝から異様な熱気が混ざりあっていた。

95年10月の終わりのこと。リマに本拠をおき、ペルー・サッカー界の人気を二分するプロ・サッカーチーム《アリアンサ》と《ユニベルシタリオ》の「クラシコ（伝統戦、ダービー・マッチ）」が予定されていたからである。この時ばかりは、リマ・カトリック大学に半年にわたり短期派遣され、日本文化論を講じていた。数日前からリマの街角では、両チームのインチャ（熱狂的ファン）が、冗談を交えながら、互いを罵倒しあっている。それは「クラシコ」前の日常的風景であった。

現在ペルーは一見したところ、とても活気づいている。アルベルト・フジモリ大統領の柔軟な経済自由化政策は、外国資本の怒濤のような流入を許し、町はピカピカの新製品であふれかえっている。治安も確保され、日本からペルーへ向かう航空機は、インカの古都クスコを目指す旅行者を満載していく。だが、ペルーの表層的な平安の脆弱さを、その日の「クラシコ」は露呈させてしまうのである。

この日の試合は、上位にいる二チームが、首位チームへの挑戦権をかけて闘ったもので、当初からその熾烈さが予想されていた。主審はテハダ氏。数年前Jリーグに招聘され、その俊敏かつ確実なジャッジの美しさが日本でたいへんに評価されたことも記憶に新しい。ところがその彼が、膠着状態の続く試合の途中、致命的なミスをしてしまう。アリアンサに与えたペナルティ・キックの権利を、ユニベルシタリオの選手の抗議を聞き入れ、無効にしてしまったのである。アリアンサの選手は猛烈に抗議をした。しかし、怒ったのは選手だけではない。スタジアムに凝集していたインチャたちが、どこに隠し持っていたのであろう、石や瓶を選手たちに向けて雨霰と投げはじめたのである。その一つが、ユニベルシタリオのキーパーの腕を直撃する。ユニベルシタリオのインチャも、負けじとものを投げ込む。グラウンドは、戦場のごとき様相を呈しはじめた。続行不可能と判断したテハダ主審は、試合中止を宣言。「クラシコ」は史上異例な状況を宙づりにしたまま終わった。インチャはおさまらない、スタジアムの外では、両チームのファンが対峙し、乱闘が繰り返された。



ペルー・サッカーは、19世紀末、英国の船乗りにより伝えられ、リマの下層社会に生きる黒人労働者たちの娯楽として根をおろした（リマには16世紀より、アフリカ大陸から「輸入」された黒人奴隷の末裔が今も多数生活するが、この事実は日本ではあまり知られてはいない）。当時のリマは、支配者階級白人系住民と、黒人や混血よりなる労働者階級によって構成されていた。アリアンサは1901年に創設された最も古いクラブの一つで、黒人主体のチームとしてサッカー界に君臨してきた。ペルー・サッカーは今でこそ凋落気味だが、かつてはアルゼンチン、ブラジル、ウルグアイとともに「南米の四強」を構成し、78年、82年のワールドカップにも出場を果たしてきた。黒人選手たちのしなやかな肉体から繰り出されるボールの軌跡の美しさに、世界中のファンが唸ったものである。

さて黒人サッカーの突出に対して歯がゆい思いをしていた上・中流階級の人々は、大学生を主体とするクラブ、ユニベルシタリオを1927年に結成する。以来リマ市は、スポーツにおいてもヘゲモニーを確立しようとする白人と、日頃の社会的抑圧からの一時的救済を、サッカーの勝利に求める黒人系住民との闘争を、ボールの回転の中に見いだしてきたのである。かつて人々は、グラウンドのなかで混ざりあう両チームの選手を、「カフェ・コン・レツチェ」、つまり漆黒のコー

ヒーと純白のミルクの混淆にたとえ、試合ごと、その味を確かめるためスタジアムに足を運んだ。そこには支配関係が構造化されているとはいえ、安定した「文化」の香りが確かにあった。

ところがリマの状況も今世紀後半以降変わった。都市にはアンデス山岳地帯の貧困化した村から職を求めて殺到したインディオや混血の人々があふれ、彼らは行商や雑貨商などのインフォーマル・セクターに生存をかけ、市の周囲に広がるスラム街で汗みずくになって生活するようになった。今日のペルー諸都市の新しい顔となった彼らが「チョロ」と呼ばれる階層なのであり、スタジアムでペルー版フリーガンと化す若者の多くがこのチョロたちなのである。

派手なフジモリ大統領の経済政策は、実際にはこのチョロ層まで届かない。スラム街ので小学校建設などを外国の援助で騒々しくおこない、彼らの不満を巧みに調整しようとする策士フジモリの意志にも関わらず、国の利鞘を中流以上の階層に吸い上げられていることを、ハチドリのごとき賃金しか手にできないチョロたちは熟知している。スタジアムでの無軌道な暴力によって、若者たちはその異議申し立てを爆発させるのである。カフェ・コン・レッチェの図式はもはや成立しない。彼らにとって、アリアンサ、ユニベルシタリオの両クラブが構築してきた伝統的「文化」などどうでもよいことなのだ。



かつては、芳醇な色を湛えていたペルー・サッカーの味も、大きく変質していく。おそらく、この増え続けゆくチョロ層が、新しいサッカーの創造に非暴力的な仕方でもかかわってゆく時、今やワールドカップからも、オリンピックからも見放されてしまったペルー・サッカーの新しいかたちが生み出される。それにはもう少し時間がかかりそうだ。

(この文章は、東京大学教養学部報402号 - 1996年5月15日発行 - に掲載されたものを、同紙の許可を得て、加筆・修正したものです)

《付記》

ペルーのサッカーは、相変わらず低迷している。2010年南アフリカワールドカップの南米予選でも、堂々と最下位を突っ走っている。嗚呼！いったい、何がいけないのか？ピサロ、ゲレーロ、ファルファン、才能豊かな、世界的評価の高い選手もたくさんいるのに！「協会が悪い」という声が聞こえるが、「協会が悪い」のは、日本をはじめ、どこも同じ、普遍的な現象だ。ペルー・サッカーを愛する人々の歯ぎしりの音だけが聞こえてくる。